

栗野・徒然日記

五帖の巻・冬

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2024.11～12.14 里は冬へと急ぎ支度



遅ればせの秋もいつの間にか深まった 11 下旬から師走にかけて、時雨れる日が続き、百々ヶ峰や紅葉する眉山に雲が湧きあがりました。やがて伊吹から雪雲が押し寄せるように(トップ写真 12. 8)。

師走に入り富有柿は 1 月遅れの出荷最盛期を迎えています。こんなことは記憶にありません。水不足と遅くまで暑かったのが原因で、小ぶりだけれど甘さは格別だそうです。

師走を迎えた栗野の里は、天気具合ばかりではなく、人々の動きにも心持ち慌ただしさを感じさせます。



▲時雨が去った後、里山から湧き上がる雲(手前は小学校)
【11. 30】



▲これは渋柿と名残月



▲翌朝、眉山の山頂付近には雲がたなびき、すぐに消えました【12.1】



▲鳥羽川のカモの数も増えてきました【12.1】



▲冬晴れの眉山の雄姿、ところどころ紅葉真っ盛りです【12.4】



▲気温は、ついに0度【12.10 6.16am】



▲柔らかな日差しでもしっかりと干しあがりました【12.12】

2024.12.17 消えたお堂、現れた…



▲お堂に安置されていたので、文字も鮮明に判読できます。

栗野西の辻屋にあったお堂が、消えていました。しばらく、こちらを通りかからなかったのも、まったく気づきませんでした【ガードレールの曲線の向こう側に建っていました】。弘化2年(1845年)建立の、小さいながらも荘厳な雰囲気を持つお堂でした。

お堂が消えたことに気付く前に目に入ってきたのは、昨日置かれたばかりのような石像。東に少し離れた場所に、すっと立っていました。お堂に安置されていた宝暦(1760)の座像です。

「廻國供養墳」の文字が刻まれています。江戸時代に、全国66カ所の行脚の途上で亡くなった修行僧(六部様)を、村のしきたりで供養したものです。お堂がなくなったのは残念ですが、扉越しに中を見ても暗くて見えなかったお顔が拝見できるようになりました。

この春には、岩野田地域で最も古い石仏が八幡神社に移されたりと、この地の石仏にも時代の波が押し寄せているようです。路傍の文化を通じて、地域の歴史文化を次代にも伝えたいですね。



▲座像が安置されていたお堂。

2025.1.3 里のお正月



無事に新年を迎えることができました。感謝の一言です。

今更ですが、美濃・尾張地方のお雑煮は、とても有名ですね。角餅、もち菜と呼ばれる小松菜の一種を、澄まし汁で軟らかく煮込み、器に盛りつけ、かつお節をかけていただきます。シンプルですが、あっさりしていて、おせちにも、そして御屠蘇ともよく合います。私の子供のころは、厚めののしもちを切り分けていましたが、一つがかなり大きいものでした。それを7個食べたとか、8個食べたとか、自慢し合っている大人を、ちょっと不思議に感じていました。

正月らしさ、わくわく感、町からも私自身からも薄れていった感があります。最近あまり凧揚げを見かけませんね。揚げられる場所も限られていますし。

それでも、栗野では野仏にお花やお餅が供えられた様は、新春の風情を味あわせてくれます。祠のない野仏の付近には、南天が植えられていることが多いようです。実もたわわで、まだ鳥にも食べられていないこの季節だから気付いたものです。



▲鳥羽川堤の水防倉庫付近の馬頭観音像。右側に南天が実を付けている。



▲昨年廃業されたはちみつ屋さんが建てられたと思われる蜂蜜の碑にも、南天の実がたわわに。



▲栗野台の南口の地藏菩薩像(1771年)と右の馬頭観音像の横にも、南天が植えられている。



▲路地の祠には、南天が松や笹とともに活けられています。道を挟んだ場所に南天が植えられていました。



▲栗野西の南宮神社にお参り。お社の南側にそびえていた古木は、伐採されて久しい。



▲栗野東辻の地藏堂。お堂には地域で番目に古い地藏菩薩像(1695年)、右には薬師如来像、聖観音像、馬頭観音像など。



▲ちなみに、3が日に56万人が訪れたという伊奈波神社の境内の樹木も、伐採されていました。



◀もち菜(いつのころからか、「正月菜」の品名で種が売られています)を10月に蒔いて葉を収穫、トップ写真のお雑煮に使いました。東海地方で栽培されているとの説明書きがありますが、袋中の種の生産地はオーストラリアとあります。

2025.1.10 里の雪



この冬最強寒波のせいで、栗野もすっかり雪景色。中心市街地は10cmの積雪が、この近辺は15cmといったところでしょうか。たった8kmで、こんなに違うものか。通勤・通学は大変ですね。鶉飼い大橋が完成するまでは、早朝にバスに乗っても、長良橋北詰めに着くまでに11時を回っていました。そこで下車し、中心市街地まで歩いたものです。それでもまだ、雪の降る景色を風情があると見ていただける地域は、幸せですね。降雪地帯の雪下ろしや、新聞配達やごみ収集の苦勞がしのべれます。



▲降り続く雪(7時10分・栗野台)

2025.1.16 寄り添う



▲鳥羽川河川敷で寄り添うヌートリア

生き物たちが寄り添う理由は、猿団子みたいに暖をとるイメージが先に立つ。

現代社会の人間は、冷えた心を温め合う感がある。

先日、地域で発行しているコミバス通信の取材で、岐阜市社会福祉事業団の生活介護事業所「アートフィールド」を訪ねた。市内唯一の創作活動に特化した施設。作品やアトリエを観させていただいた。心から湧き上がるエネルギーを表現する創作活動は、まさに作家の心に寄り添っている。

寄り添う…まちづくりを突き詰めれば、地域には助け合いの絆が、そして行政には「地域に寄り添った協働の実践」が求められていると改めて思う。



▲カラスに寄り添うような名残月

▲ダイサギとカモ



▲岐阜市社会福祉事業団 生活介護事業所「アートフィールド」(栗野東 1-40)



▶ギャラリーの企画展の作品

2025.1.21 大寒???



▲大龍寺の達磨さんも暑そう…南に植栽されている古木の枝が長い影を伸ばしている

昨日大寒を迎えたのに、汗ばむ陽気。草花も戸惑いを隠せません。日本水仙は例年なら師走に咲いて、香りを漂わせますが、年が明けてようやく蕾を伸ばしました。夏に咲く東洋蘭が二度咲きしています。これまでに記憶のないことです。

昨日就任したトランプ大統領は、地球温暖化対策の国際枠組み「パリ協定」からの再離脱を指示する大統領令に署名しました。

我が国は迷走することなく、本気で取り組んでほしいものだけれど。



▲水仙がようやく花芽を伸ばし始めました



▲夏咲きの東洋蘭の二度咲き



▲狩りというより水を飲んでいるようなトビ。カモは水浴び?

2024.1.26 ワクワク…



恋の季節の始まり…カワウがもう婚姻色におめかししていました。アオサギはまだ、ダイサギはもう少し後のようです。

カワウの婚姻色は、頭が白い羽毛になり、もの一部も白くなります。

アオサギは、目先とくちばしの先までと足が赤っぽいっぽなるそうです。

ダイサギは、くちばしは黒、目は赤橙色、目先は青色とか。

しばらくは、気を付けて見るようにします。

この日は、岐阜県知事選挙の投票日でした。

「安心とワクワクにあふれ、人やモノが集まる岐阜県」を目指す新人の江崎禎英氏が当選。

平成15年に従来の不在者投票から、現在の期日前投票制度に変わりました。該当する人は、どちらも当日、投票できない人が対象なのですが、実際の運用は、半世紀前とは大きく異なります。50年前は、不在者投票に行くと、「どうして当日、投票できないのか」という疑いを、



▲アオサギはまだ、婚姻色に変わっていません

かけられるところから始まって、根掘り葉掘り尋ねられました。とにかく高圧的だった記憶があります。候補者の一覧表も、投票所の外に張り出してあって、確認したい、と出ようとする、とても嫌な顔をされたものです。

今では、考えられないですね。それでも、今回の知事選挙は、投票率36.21%と過去2番目の低さ。立候補者が2人という選択肢も影響したのでしょうか、投票が権利であるとの認識だけでは、投票制度が変革されても、投票率向上にはつながらないのが実態のようです。他国のように投票を義務化することも議論の余地はありそう…?



▲ダイサギの婚姻色は、4月ごろでしょうか…



▲3日後、カワウの婚姻色の個体数が増えていました(1月29日)



▲県知事選の投票所
(11:39am)

2025.2.2 新しい行事食



行事食というと、伝統的な食べ物が、頭に浮かびますよね。年越しイワシ、節分イワシもそう。そういえば三輪地区の一部にはイワシの頭を門に飾る風習もあったなあ（まだ継承されているかしらん）。

節分汁（鬼除け）を初めて食しました。冷凍したはずのイワシは切らしていたため、この日は、巻き寿司と節分汁。恵方巻きに添える献立として、けんちん汁やうち豆汁（福井県）をヒントに、2010年頃から考案され14年に節分汁として蒸し大豆の業者が提唱したとのこと。

江戸時代の平賀源内のウナギのような商魂たくましい恵方巻きのイメージはいまいち良くないけれど、我が家で作る分には、まあ、良いんじゃない?!

節分汁、確かにお豆はおいしかったですよ。豆のスープは苦手だけれど、これは良いかも。

2025.2.4 「長良川」映画化



岐阜市出身の作家、松田悠八さんの小説「長良川」が、映画化されました。映画化の話が持ち上がったのは、さかのぼること平成10年代半ばと記憶しています。市民で後押ししようという会が発足するも、かつて巨額の資金が映画製作に要したとのトラウマもあってか、支援の輪は残念ながら、広がりませんでした。いつか立ち消えとなっていました。このほど映画化されたことを知り、感慨深いものがあります。

原作では、戦後間もない昭和20年代、子どもたちが長良川を舞台に遊び回り、やがて事件にも遭遇します。実在したオトコオンナのしょーちゃんも登場。柳ヶ瀬では有名人で、居酒屋で飲んでいたとき、一度だけ、通りを歩いているのを見掛けたことがあります。

宝田明をキャスティングの意向をチラと披露されたこともありました…。

今回、メガホンをとった金子雅和監督は、原作をもとにしたオリジナル脚本を書き上げ、「光る川」のタイトルで映画化をしたとのこと。映画はすでに完成し、昨年11月には、スペインのヒホン国際映画祭で賞を受賞したそうです。原作はかなりアレンジされているようですが、現代にあったメッセージ性が込められているに違いありません。

3月2日、シネックスで上映が始まるそうです。楽しみです。

2025.2.6 「再開発事業」凍結?!



▲眉山と鳥羽川もすっぽりと雪をかぶって(2月6日 7時11分)

今季最強寒波により、2日にわたり、雪に見舞われている。中心市街地は、積雪2cmとか報じられているけれど、栗野は、昨日が10cm、今朝は15cmといったところ。橋の上は、20cmはありそう。

2025年度着工予定だった岐阜駅北のツインタワーが、人手不足や資材の高騰などで、急遽延期となったとの記事が、新聞の1面に踊った。アパレル・繊維の岐阜市の象徴だった問屋町と言われるこの地区は、戦後戸板1枚からの商いで始まったとも言われ、全国からのバイヤーが集まり、商人宿も含め地域は活況を呈した。

市の呼びかけで再開発研究会が発足したのが平成元年度。しかし、当時もまだ、店舗1階だけで12階建て分の売上げがあったとすら言われ、再開発へのモチベーションは、希薄であった。研究会が地元の銀行の会議室分かりて開かれていた時も、絶えることなく、自転車に乗った銀行員が、川の鞆を片手に、街区の細い路地を巡り、店舗を回って帰ってきた。

現在、シティタワー43がそびえるいわゆる駅西再開発地区は、当初、ホテルの用途だったが、名古屋三越出店を前提にした商業床に用途変更された。しかし、当時の市内には、3つの百貨店はじめ大規模スーパーが乱立し、さらに百貨店が出店すれば、横浜市を超える商業床となる。出店は見送りになっても当然だった。

やがて年月を経て、名古屋県内でもダントツに高額だった地価が急落した結果、住宅用途でも建設費の採算が合うこととなり、マンションを主たる用途として立ち上がったのである。

一方、名鉄岐阜駅前のパルコが、マーサに移転したジャスコの跡地周辺での第2パルコ建設の意向を示す。が、2年後、バブル崩壊で、立ち消えとなる。高島屋南地区の再開発研究会も、平成元年度に設置されるが、完成は、令和4年にまで要した。

再開発事業には、権利者の同意、出店調整などに長い年月がかかり、当然、時代背景に大きく左右される。そういう意味では、映画館の立て直しにこだわった岐阜シネックスビル(平成6年完成)や長住町5丁目のホテルなどのテナントの入る木材などを扱う会社本社ビル(平成3年完成)は、異例ともいえるが、岐阜資本の企業ならではと言えよう。

近年、中心市街地のマンションも過剰傾向にあるとも言われる。他都市では、高層ビルの建設を厳しく制限するケースも見られるようになった。

中心部に機能を集中し、利便性とインフラの維持費を軽減するコンパクトシティが流行りとなっているが、災害時や住まい方を考えた時、岐阜市の基本構想の、多様な核のあるネットワーク

化された都市を目指す観点が大変重要だ。

中心市街地はそれにふさわしい都市機能を、観光地は景観にも配慮し魅力向上を、そして郊外型の居住地は住環境、歴史文化、里地里山の環境保全など地域の特性を活かしたまちづくりが欠かせない。都市計画を行政の身に白紙委任することなく、地域の将来あるべきビジョンを、市と地域がともに描き、役割分担してまちづくりを進めるエリアマネジメント、そして都市内分権が求められるはずだ。



▲鳥羽川のカモの群れ(2月5日 8時16分) 翌6日はさらに冷え込んだせいか、カモの姿が見当たらず



▲昨春開花したのだろう、120年に一度のハチクの花…長い年月を超えて実を結ぶ。開花した竹は、枯れてしまう。ハチクの開花については、過去の徒然日記でも紹介(令和4年4月)

2025.2.11 鯖を読む



水産庁が、太平洋の鯖の捕獲量を、8割減とするとか。2年で成魚になっていた鯖が、何らかの理由で4年かかる(地球温暖化によるプランクトンの減少の影響とか?)ようになったとか。産卵前の小さな魚を乱獲した結果、生息数が激減したのが背景にあるとか。一方、単に小型化しただけで、脂も十分乗った成魚なのだ、とか、マイワシが豊漁で回遊できず沖に遠ざかってしまい資源量が少なくなったわけではない、とか、議論百出。

昨年の11月1日には、八戸港で3年ぶりに水揚げが1,000トンを超え豊漁に活気づいたばかり。何が正しいのやら。自給率の低い日本にとって水産業は欠かせないのに、何やら情けない気がする。自然界のメカニズムの不思議とも言えるが、調査研究と迅速な結果公表と解決策の一連の体制が必要。呪縛にかかっているのか、対策の遅れが目立つようだ。結局、令和の米騒動ではないけれど、対症療法による後始末行政のそしりを受けてしまう。

話は変わって、半世紀前は、お魚離れと言われ、私の育った町でも、魚屋と八百屋が並んでいたけれど、ほどなく魚屋は店をたたんだ。

農水省が後押しして昭和の末期には、魚の料理教室(その名も「おさかな教室」)を巡回実施した。岐阜市でも参加者を募り開催した時、訪れた講師が「八戸でもやりました」と言う。「漁港なのにな?」といぶかしがる私に、それなりに高く売れる都心などへ売りさばかれて、地元に出回らないから魚離れの傾向が見られるとの答え。岐阜枝豆の粒ぞろいは関西方面に引き取られることを思い起こす(コロナ禍の時は、地元にも良品が安価に出回っていた)。

京都の出町櫛形商店街は、鯖で有名なことを、世界ニッポン行きたい応援団で放映されて初めて知った。たまたま一昨年の師走に、半世紀ぶりに訪ねた。夫婦で営む小さな店が、残っていたことに感動してしまった。チャンポン麺や、かす汁が美味しかったが、鯖寿司の店とは知らなかった。大きくなっておばあさんそっくりの顔になった孫が、鯖寿司をこさえていた。鯖の価格高騰のあおりを受けるのは、消費者だけではない。便乗値上げのための鯖読みは、ごめん被りたい。



▲テレビでは、アーケードや建物に、大きな鯖の模型が掲げられていたが、とんと気付かなかった。



▲こんなに赤っぽい青果店が、ひなびた商店街に異彩を放っていた。この西隣はテレビにも出ていた魚屋。

2025.2.20 小米雪



朝、粉雪（小米雪）がうっすらと地面を覆っています。霜柱の上にも。

昨日、膨らんだ頭を地表に出した福寿草は、厚みのない雪の下に隠れてしまいました。シモバシラ（シソ科の植物）の根元に、名前の由来である氷柱（毛細現象で出来上がった）が出来上がっています。

政府が備蓄米放出を決定しました。もちろん、市場価格はまだ下がりません。食糧の自給率に乏しい国、主食を供給する農地は減少の一途をたどっています。小米雪が消えるがごとく。



▲昨日、膨らみ始めた庭のフクジュソウでしたが...



▲シモバシラの上にも小米雪



▲シソ科の植物シモバシラの名の由来(自宅の庭)



▲サザンカも薄化粧



▲凍てつく田



▲高騰した価格だが、農家にとっては適正価格とか・・・

2025.2.21 幸せの青い鳥



▲カップルにはなれそうもない2羽…

翡翠色の鳥が飛翔していました。カワセミ(漢字で翡翠)です。しかも2羽。空に溶け込むコバルトブルーは、夏がお似合いです。春は、恋の季節。オス同士が縄張り争いを繰り返す時期でもあります。良い漁場はメスへの求婚に欠かせないのです。鳥羽川の生態は、随分変わってしまいましたが、それなりに餌には困らないようです。2羽は恋人同士かオス同士か、果たしてどちらでしょう？



▲堤防には、例年より遅いニホンズイセンが咲き始めました



▲春に先駆けて散りばめたように咲くオオイヌノフグリもコバルトブルー

2025.2.26 幸せの黒い鳥



鳥羽川に、やや落ち着きのなさそうな動きをしている真っ黒な鳥が、1羽だけ泳いでいました。遠目ですがくちばしが白いのが確認できます。オオバンのようなようです。この水鳥は、幸せの黒い鳥と良われています。潜水してくわえてきた水草を、カモに横取りされても怒らないので、カモたちにとっては、食べ物を恵んでくれる「幸せを呼ぶ黒い鳥」なのだそうです。カモより身体が小さいので喧嘩にならないみたい。理由はともかく、幸せを分け与える幸せ？

外来種のオオカナダモが繁茂するようになった鳥羽川ですが、冬場は枯れてるはず。だから、あまり見かけないのでしょいか。



▲2羽のカルガモは仲良く泳いでいます



▲カルガモもご相伴にあずかったのでしょうか？

これ以降の日記は、現在編集中です。